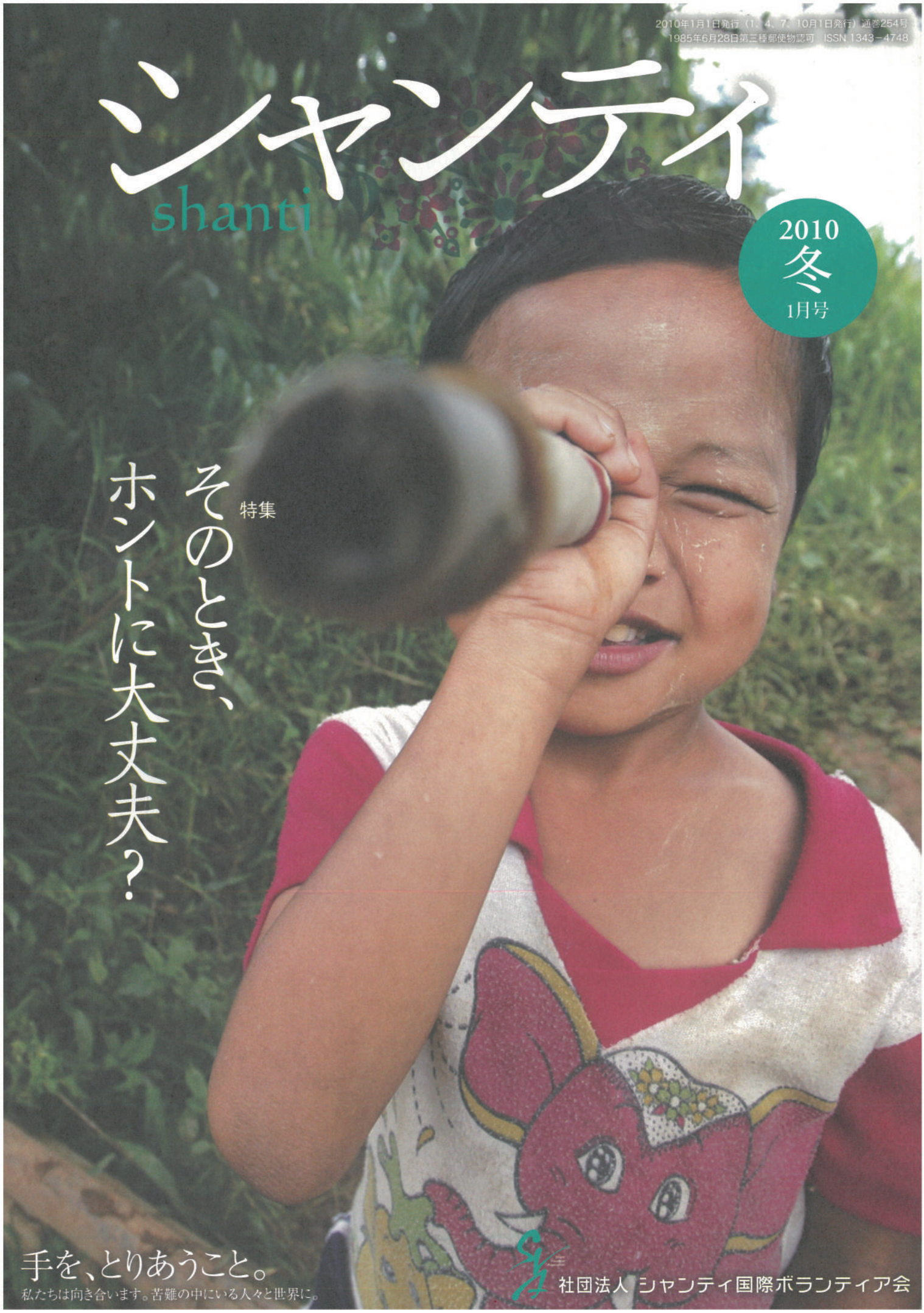
2010年1月1日発行（1、4、7、10月1日発行）通巻254号
1985年6月28日第三種郵便物認可　ISSN 1343－4748

シャンティ
shanti

2010
冬
1月号

特集
そのとき、ホントに大丈夫？

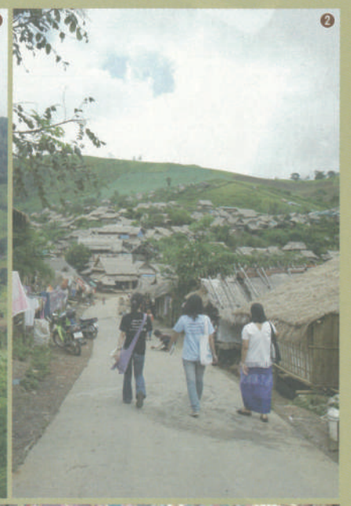


手を、とりあうこと。
私たちは向き合います。苦難の中にいる人々と世界に。

社団法人 シャンティ国際ボランティア会

プロジェクトの風景

a Scene of Our Project



①ウンピアムキャンプへ向かう途中の景色。　②メラキャンプの図書館へ向かう道。　③乾季は道がいいが、雨季になると轍（わだち）にはまってしまう。
④図書館の近くで。仲の良い姉妹。キャンプでは、大きい子どもが小さい子どもの面倒を見る姿があちこちに見られる。　⑤絵本を手にする女の子。（写真：すべて川畑嘉文）

Myanmar/Burma Refugees Camp

ミャンマー（ビルマ）難民事業　難民キャンプへ向かうスタッフ

〈道なき道を行く〉

雨季も終わりに近づいたキャンプへの道。突然のスコールが上がり雲から太陽がのぞくと、美しいタイ北部の山岳風景が一面に広がる。同時にあちこちでみられる道の決壊。メーソットから一番近いキャンプで約1時間、遠いキャンプで約10時間。うねる山道を登る際に響くエンジン音、車酔いをする人としない人の運命の分かれ道だ。

キャンプ周辺は、鉄線が張られ、軍によるチェックポイントがある。誰でも飛び越えられそうな鉄線は、外の世界と難民キャンプを遮断する大きな壁。入口のゲートはたった一本の木。タイの軍人によって開閉される。軍人の表情はその時々のキャンプの政情を反映している。30年間経過した今も、どこか緊張感が漂うキャンプの入口。

「ハラゲー」「ミンガラバン」※入口を一歩入った瞬間から、ビルマの多民族の言語が飛び交う。タイ国内の村と一見変わらないように見えるキャンプ。しかし、一歩ゲートの中に入ればそこは、ビルマ（ミャンマー）なのだ。キャンプの中は、異空間。隙間なく建てられた家屋に囲まれた図書館で子どもたちと過ごしていると、キャンプにいる事を忘れてしまう。「そろそろ時間です」そんな言葉に、ハッと現実に戻される。18時まで、と書かれたゲートが車両の後ろで静かに閉じる。帰り道の風景はいつもどこか寂しく感じる。（山本英里）

※「ハラゲー」はカレン語、「ミンガラバン」はビルマ語のあいさつ。

【SVAの使命】　私たちは、地球上の貧困や戦争、内紛、環境破壊、災害などによって苦しむ人々のそばに立ち、苦しみを分かち合い、その人々と共に解決のための活動を行います。特にアジアにおける教育・文化活動を通じて、「共に生き、共に学ぶ」ことができるシャンティ（平和）な社会の実現をはかります。

cover photo

表紙写真：「なにが見える？」
ミャンマー（ビルマ）難民キャンプにて
［撮影：川畑嘉文］

巻頭言

道（みち）

忘れてはいけないこと 阪神・淡路大震災から15年

事務局次長　市川斉

阪神・淡路大震災の際、SVAは神戸事務所を立ち上げ、被災地の支援にあたっていた。震災から3ヵ月も経ったころ、ボランティアが活動する避難所で、学校の教員から、「ボランティアの皆さんは、良い思いをして帰って行ったことでしょう。でも、ボランティアが物を配りすぎて、最近子どもたちが物を大切にしなくなっているし、心も荒んでいるように思う。そんな子どもたちに寄り添って心を立て直すのは、残された私たちであることを忘れないでほしい」と言われた。この教員は私たちの活動のよき理解者であったし、活動を非難したわけでもなかった。でも、この一言が、今でも突き刺さったままだ。

満開の桜が散るとともに、多くのボランティアが去っていった。そこからが本当の苦しみでもあった。地元の人を中心に被災地を支えていくことに奔走したが、遅々として復興しない街、仮設住宅で多発する孤独死、復興の個人差による心の溝に、人々は疲弊していった。

SVA内部からも「いつまでやるんだ？方向性はどうするんだ？」と声が聞こえてきた。当時、神戸事務所長だった私は、そんな簡単なことではないと叫びたい気持ちで悶々としていた。外部から被災地の苦悩が見えにくくなる中、街全体がブラックホールに吸い込まれていく、まるで、出口のないトンネルに入っているようだった。

SVAは2年半、神戸で活動し、事務所撤収後も被災地と関わって5年間で活動を終了した。被災地のもがきが続く中、どこまでかかわるべきなのか、厳しい選択でもあった。

緊急救援とは何か？　自分たちの都合で活動を考えていないか？　人々が生活を再建する姿を思い浮かべながら、活動をしているか？　どんな活動にも終わりがあり、課題も残る。どれだけ自分の弱さと対峙して、被災者と共に考え行動できるのか？

それは、15年経った今も、自分に課せられた課題でもある。あの震災で亡くなった6434人の命を無駄にしないために。そして、今でも、被災地で苦しむ人々のためにも。

少しでも日差しを避けるため、木の下で授業を受けている（アフガニスタン）

地球に絵本のタネをまく vol.4

そだてる

子どもたちの手の中に飛んでいった絵本という「タネ」はすくすく育ち、大きな花を咲かせています。

アフガニスタンに、ムチで子どもを叩いていた先生がいました。それが教育だと教えられていたのです。しかし、おはなし活動をはじめたら子どもたちの人気者に。「以前はムチで叩くことでしか、子どもは自分の言うことを聞かないと思っていた。おはなしはムチよりも効果がある」と、今では笑顔で授業をしています。

カンボジアには、字の読めないお母さんのために図書室の本をノートに写す男の子がいます。兄弟のために、絵本を写す女の子もいます。小学校に弟妹を連れてきている子もいます。おはなしの時間には、赤ちゃんも絵本をじっと見ています。「自分が小さい時は内戦中で、本が読めなかったので、子どもたちには同じ思いをさせたくない」と、先生はがんばっています。

この花が世界に広がっていくように、SVAはタネをまき続けていきます。希望と笑顔の花であふれる社会を一緒につくりませんか。

【特集】

阪神・淡路大震災から15年

そのとき、ホントに大丈夫？

緊急救援活動のあゆみ

私たちの暮らしはこのままで大丈夫なのでしょうか？1995年、阪神・淡路大震災によって6434人が亡くなりました。被災者は家族や友人を失い、心や体に傷を受けました。そして、復興に関わった人たちは、自分たちの暮らし方について考えさせられることになります。

SVAの緊急救援活動は、この阪神・淡路大震災をきっかけに本格的に始まりました。15年をむかえ、この特集ではSVAの緊急救援活動のあり方、めざすべき方向性を考えます。

SVAの緊急救援活動は、試行錯誤の連続でした。阪神・淡路大震災では、子どものための「遊び場」活動や復興まちづくりのお手伝い、在日朝鮮・韓国人高齢者のための識字教室などの活動を行いました。そこから、「地域や文化に根ざした復興支援」や「子どもたちのための活動」を目標としてきました。

海外の被災地でも、「復興は子どもたちの笑顔から」と工夫してきました。子どもが元気を取り戻すことが、大人を勇気づけて復興への第一歩となります。小学校の授業が早く再開できるように仮設校舎を建設する。災害時の怖い記憶を心にかかえる子どもたちの心を癒すため遠足やお絵かき教室などを行う。また、村の保育園や災害遺児のための孤児院を建設したり、絵本や学用品を提供したりと、被災した地域や子どもの状況に合わせて活動を行ってきました。SVAが得意とする図書館の建設や、移動図書館活動、教員の「絵本の読み聞かせ」実習などを通じた復興支援も行いました。

SVAが復興支援において、目指している姿勢があります。まず、被災された人のそばに身を置き「よりそう」こと。地元の人と「共に学びながら」そこで起きている問題や課題に取り組むことです。

海外の被災地では、資源や知識が乏しいなかでも村人が助け合う姿を見て、感じることがあります。私たちの日本での暮らしです。高齢者や障がい者へのサポート、外国人との共生、子どもたちへの命の教育、環境のことや社会のしくみから、家族のありようまで、より良い地域社会のありかたのヒントが海外の現場から見えてきます。

ぼくらの町を歩いてみよう

いざというときの備えは大丈夫？「避難所に行けば…」「行政が何とかしてくれる」と安心していませんか。私たちの暮らしは本当に安心なのでしょうか。

私たちは海外の被災地で、村人たちの助けあいを目の当たりにします。苦しいなかで互いに支えあうことの大切さを学びます。自分の町をもっと知ること、近所に知りあいを増やすことが、豊かで安心な暮らしにつながると考えます。

「防災寺子屋」はSVAからのひとつの提案です。

防災寺子屋（ボウサイテラコヤ）の一日

みんなで町を歩こう！災害時の避難所はどこ？お地蔵さんが！など発見があるかも。わからないことは聞いてみたり、写真を撮ったり、メモを取りながら歩きます。

会場に戻ったら、歩いて気づいたことや疑問などを話し合います。模造紙に写真を貼ったり、メモした情報を書き込んで**手作りの「防災マップ」を作ります。**

グループごとに防災マップの発表です。同じ町を歩いても気づくことが違ったりします。意見交換しながら参加者それぞれの心にも「町の地図」ができます。

子どものために防災寺子屋を企画した実行委員会。準備の過程で大人にも横のつながりが生まれます。近所に**「顔の見える関係」**を増やすきっかけとなります。

「防災寺子屋」の基本は、自分たちの町を知ることです。

子どもからお年寄りまで、グループになって「まち歩き」をします。

歩きながら、地震の時はどの道を通ってどこに逃げたらいいのか、火災が心配なのはどこか、水害の時はどこが危ないのかなど、お互いに話しながら、自分たちが暮らす町を点検します。

歩いているうちに、いろいろなことに気がつきます。新しく出来たお店、街角に立つ石碑、町の歴史や文化、変わりつつある風景などに出会います。「外国の人たちが意外に多く住んでいた！」とか「こんな、いい公園があったんだ！」など気づきも生まれます。

自分が普段暮らしている町のことを知らない方も多いのではないでしょうか。

まち歩きから会場に帰ってきたら、みんなで「防災マップ」作りをします。防災倉庫や防火水そうがどこにあったのか、地域の避難所はどこか、危険そうな所はあるのか、災害の時に役に立つ物をもっているお店など、参加者みんなで話しあいながら地図を作ります。

最後にはグループごとに結果を発表して、平時から自分たちが出来る工夫はあるのか、どうしたら災害に強い町になるのか、逃げ遅れる人を無くすにはどうしたらいいのかなど、その日に気づいたことを共有して、1日を終えます。

まち歩きのほかに、防災体験として、災害食で昼食を作ってみる。消防署の協力で、消火器や起震車、煙ハウスなどを体験してみる。小学校の体育館で避難所体験訓練をしてみるなど、いろいろなプログラムを取り入れて「防災寺子屋」を実施しています。

はじまりは 阪神・淡路大震災から

神戸での被災者支援をきっかけに、ずっと防災に関わってきたふたり。
SVAの緊急救援が目指すものを聞きました。

自然の猛威に直面するたび、私たちは人間の力がいかに無力であるかを思い知らされてきた。地震や津波の予測技術が高まった現代でも、襲いかかってくる災いをコントロールするまでには至っていない。私たちはそれらの災いにどう向き合い、何を学んできたのだろうか。

ボランティア元年ともいわれる1995年の阪神・淡路大震災以来、災害が起こるたび、被災地には〝困ったときはお互い様〟を合言葉として大勢のボランティアが集まってくるようになった。市民の間には新たな価値観が生まれ、根づき始めているのだと感じる。

しかし、災害は私たちが抱えている社会の歪み、日常の軋みといったものをむき出しにした。一人アパートに暮らしていた若者が、家屋の下敷きになりながら炎に呑まれていく。住み慣れた土地から仮設住宅に移り住んだお年寄りが、誰にも気づかれることなく死を迎えていく。家屋の耐震化、要援護者の支援システム、生活再建支援法の充実といった対策で守られる命もあるが、神戸の街でも、パキスタンの被災地でもその時、その人を救い出したのは、家族であり、隣に暮らす人たちの存在だった。家を失い、仕事も失くした人々の心の支えになりえたものは、ボランティアのようそいであり、地域の絆であったように思う。

火山性ガスがいまだ止まぬ三宅島に、4年半待って帰島を果たしたお年寄りたちが住んでいる。放置されて荒れた我が家を前に立ちすくむ姿を見て心配したが、半年が過ぎた頃、「やっぱり島はいいよ。風はいいし、苗場はあるし、鳥たちのさえずりを聞くと帰ってこれて本当に良かったと思うの。年寄りばっかりだけど、昔からの人間が近くに居てくれるからね」といった声が聞こえてくるようになった。長年生きてきた土地とともに営みを続けられること、住民の支えあいの仕組み、地域の関わりを築きなおしていくことが、人の暮らしにおいていかに大切なものであるかを教えられた気がする。

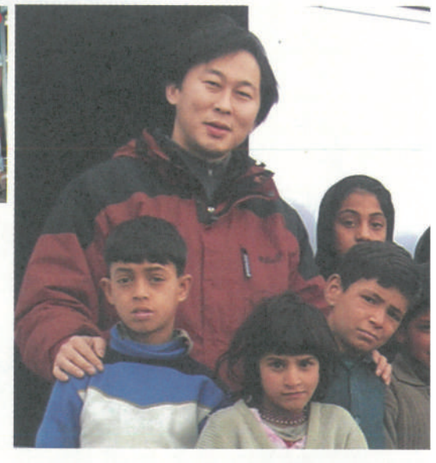
SVAが教育と文化の面から支え続けてきた国々には、小学校で学ぶ機会さえ与えられない子どもたちや、移民であるために正当に働く権利さえ得られない人たちがいる。彼らは貧困や差別にあえぎながらも、親類や隣人、地域の人々に支えられ、助けあうことで、毎日を確かに生きようとしている。

人と人との絆の意味を問いなおしていくことがもう一つの私たちの務め

SVAの役割の一つは、〝架け橋〟であることだと思う。介護や子育てに疲れ果ててしまう家庭、学ぶことや働くことに希望を見出せない若者たち、社会の中で確かな役割を与えられず老いを重ねていく人々が増えていく社会の中で、人と人との絆の意味を問いなおしていくこと、創造しなおしていくことが、もう一つの私たちの務めだと信じる。

災害は、大切なシグナルを私たちに送っている。そのまま忘れされれば、単なる禍でしかないが、その学びを今の日常に活かすことができるとすれば、それは希望ともなる。

（関尚士）



❶SVA神戸事務所に集まったボランティア（阪神・淡路大震災）　❷久しぶりに子どもの笑顔が見られた遠足（イラン地震）
❸救援物資の配布を手伝う地元の学生。彼らも家族や友人を失くしている（パキスタン北東部地震）

関尚士 Seki Hisashi

シャンティ国際ボランティア会

1990年、SVAに入職。1995年、阪神・淡路大震災で初めて救援活動を経験する。その後一時休職してフィリピンで地域開発、プログラムマネジメントについて学ぶ。1998年、家族でラオス事務所へ赴任し、基礎教育環境の改善活動に携わる。2003年帰国し、東京事務所緊急救援室室長に着任、インド、パキスタン、中越地震、豊岡水害などの災害救援活動に従事する。2006年より国内事業課長、2008年4月よりSVA事務局長。

1「身内を失った人ばかりで、街は悲しみに満ちています。私たちも同じ境遇ですが、心の傷を負った子どもたちを誰かが受けとめてあげなくてはならないのです」イラン震災直後、崩れた園舎を背に幼稚園を再開していた園長先生の言葉。救援物資を配ることに一心不乱になっていた自分に、一番大切な支えが何であるかを問い直してくれました。

2 有事に備えてというのは、携帯ライトとSVAの緊急連絡網です。あとはプチ緊急時用で携帯電話用の充電池。

3 サークル、PTA、自治会、なんでもいいから地域でちょっと顔を利かしておくこと（特にお父さん&独身向け）。災害伝言ダイヤル「171」、寝床に倒れてくるものを置かないこと。

災害と向き合う

Q1 被災地で教えられたこと

Q2 ふだん、持ち歩いているものは

Q3 家族や友人にどんなアドバイスをしていますか

1 被災地での活動では悔しい思いばかりです。災害が起こった後にできることはほとんどありませんから。そこで、ハッとさせられた言葉としてよく憶えているのは、「あなたを待っている人は被災地の中だけじゃない」という言葉です。

2 携帯電話のストラップとして、笛とLEDの小さな懐中電灯を付けているくらいです。

3 アドバイスではありませんが、家族・友人には、「何不自由なく生きている僕らは、助けられる側でなく、助ける側にならなくちゃいけない。救助されるのではなく、救助する側になるための準備をしよう」と言っています。

❹被災者のつぶやきに耳を傾ける「行茶（ぎょうちゃ）」活動（中越沖地震）　❺庭に降り積もった火山灰の除去。重労働をボランティアが担う（三宅島）　❻過去の災害を忘れないように毎年ろうそくを灯す「1.17灯りのつどい」（東京災害ボランティアネットワーク主管）

福田信章 Fukuda Nobuaki

東京災害ボランティアネットワーク

1995年、大学在学中に、SVAのボランティアとして阪神・淡路大震災の被災地で被災者支援活動を経験。1999年から東京災害ボランティアネットワークとして、いくつかの被災地で支援活動に関わる。2000年の三宅島噴火災害では、全島避難期、帰島期にわたってボランティアコーディネーターとして関わる。2002年から東京災害ボランティアネットワーク事務局として、都内外の防災・減災プログラムの実施を担当し、現在に至る。

SVAは15年前の阪神・淡路大震災から、さまざまな地域で緊急救援活動に取り組んできた。国内外の現場で活動しているNGO団体としては、トップクラスの現場数といえるのではないだろうか。数多くの「被災地」に入り、被災者と顔を突き合わせて取り組む姿勢には感心させられるし、そのきっかけとなった阪神・淡路大震災での活動に参加できたことは、個人的に誇りに思っている。

それらの現場で気づかされたことを、その後、どれだけ活かせてきただろうか。緊急救援時の課題は数多くあれど、そのほとんどは平常時の課題でもあるはずだ。緊急救援時に気づいたことを教訓として平常時に活かしていくことが、現場に行った者の、その後の務めではないだろうか。

ここ数年のSVAの活動はその点も考慮されており、本当に敬服する。壊れた「まち」や壊れそうな「ひと」を支える緊急救援時の活動だけではない。町や人が壊れないように、平常時に同じ地域に暮らす人が集まって防災について話し合うという、防災寺子屋のような取り組みにも力を注いでいる。

僕が事務局を務めている「東京災害ボランティアネットワーク」は、SVAをはじめ、労働団体、消費者団体、福祉活動団体、NPO／NGO団体など約70団体が参加している。来たるべき災害に備え、平常時から各種団体が顔の見える関係を作っていくことを目的としたネットワーク団体だ。

ここで重要なのは「災害が起こる前（平常時）」という点だ。災害が起こる前にこそ、被災者を支える各種団体が連携していくことが重要ではないかと思っている。社会には役割・立場・個性の違う団体が数多くあり、これらが信頼に基づいた連携をしていくことが、最大の防災・減災活動であると僕たちは考えている。

信頼に基づいた連携をしていくことが最大の防災・減災活動である

SVAの防災寺子屋は、それを地域で実践している取り組みだ。被災地で気づいた課題を防災寺子屋という形で実践することは、それだけで一つの教訓化といえるだろう。

また防災寺子屋は、お寺を中心としながら、その関係者だけでなく地域住民や行政機関と連携しながら、協働で取り組んでいる。これは、役割・立場・個性の違う者（団体）同士の出会いの場となる。防災・減災活動で最も重要なポイントの一つである異団体との連携をも実践している活動といえる。今後も防災寺子屋は、地域防災力を高めていく、大きな期待が持てる注目の防災・減災活動であろう。

SVAはこれから、緊急救援活動だけでなく地域での防災・減災活動にも取り組んでいくのだろう。数々の現場を経験してきたSVAにはその使命があり、それを果たすだけの知恵と力とネットワークを持っているのだから。

（福田信章）

SVA活動報告
activity reports

ミャンマー（ビルマ）難民
Myanmar(Burma) Refugee Camps

図書館青少年ボランティア研修会

研修会では実際に演じて手法を学んでいく。人形劇は３匹の動物の助けあいの物語『Three Honest Friends』

タイのメーホンソン県にあるメラウとメラマルアン難民キャンプは、メーサリアンのサブ事務所から車で2、3時間の場所に隣接しています。いくつも峠を越えた山間部の各キャンプで10月27～30日の間、2日間ずつ図書館青少年ボランティア（以下TYV）研修会が実施されました。それぞれ約20人の若者が参加、読書推進の意義や人形劇、絵本・紙芝居、アクション・ゲームの手法などを学習しました。

毎年2回の研修会を実施していますが、第三国定住の影響などがあり、メンバーの8割が新人。しかし、TYVたちはすべての研修内容を楽しく、しかも熱心にこなし、最後には各キャンプで自主的に実施する活動計画も立案。たいへん誇らしい成果だと思いました。

タークの県のメラ難民キャンプなどと比較して、この2つのキャンプはアクセスも悪く、他のNGOによる青少年活動もまだ本格化していません。したがって、ここの若者たちは、このような創造的で、主体的に取り組める活動に飢えていると言えます。別れ際に「他のキャンプのTYVたちと文通したい」と手紙を託され、彼らの熱い気持ちが痛いほど伝わってきました。

試行錯誤しながらキャンプ・コミュニティで活動していくTYV。彼らの自主性を損なわないように、今後サポートしたい、と強く思いました。

（図書館活動アシスタント・コーディネーター　イン・ヴォンヴォラチョン）

タイ
Thailand

気持ちも手渡す奨学金授与式

ケーンを演奏するティーラメート君

前・後期の学期初めにあたる5月と11月、奨学金授与式があります。2009年11月もタイ各地に奨学生390人が集まりました。

この中で最も学生数の多いのがタイ北部パヤオ県で117人、モン族の子どもが大部分を占めています。

授与式では、奨学生がモン族の民族舞踊、民族楽器の演奏を披露しました。高校2年生のティーラメート君は民族楽器のケーンを演奏してくれました。舞いながら演奏するのが、ケーンの特徴です。

ティーラメート君が演奏を開始し、曲に合わせて飛び跳ねたり、寝ころんだりと自由自在の舞を見せると会場が沸きました。5歳のとき村の行事でのおじいちゃんの演奏を見て好きになり、それ以来、おじいちゃんから習っています。今ではモン族の子どもたちでも吹けなくなっている伝統楽器です。ティーラメート君はモン族の誇りを体で表わせるこの楽器が大好きだそうです。

大学生からは、「自分の可能性を信じ、視野を広く持ってほしい」と後輩たちに激励の言葉をおくられました。モン族の中高生にとって大学進学は遠く、叶えがたい夢です。それを実現しているモン族の先輩からの言葉が心に響くのか、真剣に聞き入っていました。

奨学金の授与のみではなく、さまざまな境遇にいる奨学生たちが一堂に会し、お互いに刺激しあい、励ましあうのが、SVAタイランドの奨学金授与式です。

（松尾久美）

カンボジア
Cambodia

新しいゴミ集積所に集まる人びと

ゴミを集める姉弟

プレイ・トアにあるゴミ集積所は、プノンペン市内からオートバイで40分ほど走ったところにあります。地平線まで続く田んぼと、ぽつん、ぽつんと立つ椰子の木。その景色の中に、いくつもの巨大な穴が現れます。その巨大な穴がプノンペン市中のゴミが集められる集積所です。

このゴミ集積所には、毎日およそ100人が働きに来ています。目が痛むほどの刺激臭の中、大量のゴミを積んだ収集車が到着した瞬間から、より高く売れそうなゴミを探し求め、我先にと駆け寄ります。その集団の中には、子どもの姿も混ざっています。大人に負けまいと、真っ先に収集車に駆け寄る2人の子どもは、大人と同じように手に金属製の鉤（かぎ）を持ち、足元はぶかぶかの長靴を履き、ゴミの山の中から器用に売れそうなものを探していました。

この2人の姉弟、姉は15歳、弟は13歳。姉は5年生まで、弟は3年生まで学校に通っていたそうですが、現在は一家5人全員で毎日このゴミ山に来ているとのこと。近くで母親と6歳の弟も忙しそうに働いていました。1日の収入は、朝5時頃から夕方4時まで働いて1人約7500リエル（約180円）だとのことです。

プノンペン市と近郊のスラムは700を越え、学校に通えない子どもがいます。

カンボジア事務所スラム事業課では、今年も他のNGOと連携して、11ヵ所のスラムで移動図書館活動を継続する予定です。ゴミ集積所で働く家庭の子どもも多数参加し、読み聞かせと読書の時間を楽しんでいます。

（鈴木亜子）

ラオス
Laos

明るい未来への祈り 南部で地鎮祭

辯天宗青年隊様と村人たち

太陽からは強い日差しがかんかんに照りつけ、気温はぐんぐん上がり、口にした水がすぐに汗となってシャツの色を変えていきます。

雨季から乾季へ変わる時期、この気候はラオス人にとっても非常に厳しいものです。足元は雨季の名残を大いに残し、ぐちゃぐちゃになった赤土は四輪駆動車のタイヤをもつかんで放さず、林業関係の大型車が残した大きな轍（わだち）を越えるたびに車の天井に頭をぶつけ、川にかかっているはずの橋が水に埋もれて立ち往生。炎天下に放り出されてしまう。

そんな季節にもかかわらず、ラオス事務所が行なう学校建設事業を支援して下さっている辯天宗青年隊の皆さんが、建設着工前の地鎮祭を行なうために、大阪からラオスの南部にあるサラワン県ワピー郡まで来てくださいました。

式典当日も、大変な暑さになりましたが、辯天宗下西教務部長は、黒色の法衣へと身支度を調え、式典に臨まれました。

常になく静まりかえっていた式典の最中。下西教務部長は滝のような汗を流しながらも、学校建設の無事完了とラオスの子どもたちの明るい未来への願いを込めてお祈りを唱えて下さいました。その声はラオスの広くて眩しい青空に響きました。

（鈴木淳子）

アフガニスタン
Afghanistan

図書活動は学校に取り入れられたか？

SVAが図書・備品を支援した学校図書館

2007年10月より、ジャララバード市内のすべての小学校22校（児童6万2321人、教員1296人）を対象にJICAの「草の根技術協力事業」として「図書普及活動を通じた初等教育の質的な改善事業」を実施しています。

22校のうち18校には図書室がありましたが、あまり活用されておらず、なかには閉鎖されている図書室も。図書室が有効に活用され、教員が授業で図書活動が取り入れるようになることがこの事業の目的です。

事業を始めて1年が経過した2008年秋、中間調査を行い結果をまとめました。その結果、図書室を終日開けている学校は事業開始前の8校から17校に、読み聞かせを実践している学校は9校から20校に、図書を授業で活用している教員は37％から96％に、図書室を週に2回以上利用している児童は28％から96％に増加し、図書活動が小学校に普及していることがわかります。

興味深い点は教員の変化です。教材を自分で作っている教員は開始前の67％から84％に、教室の飾りつけをしている教員は43％から77％に増加しました。また、子どもを時々叱るという教員は38％からわずか4％に減りました。

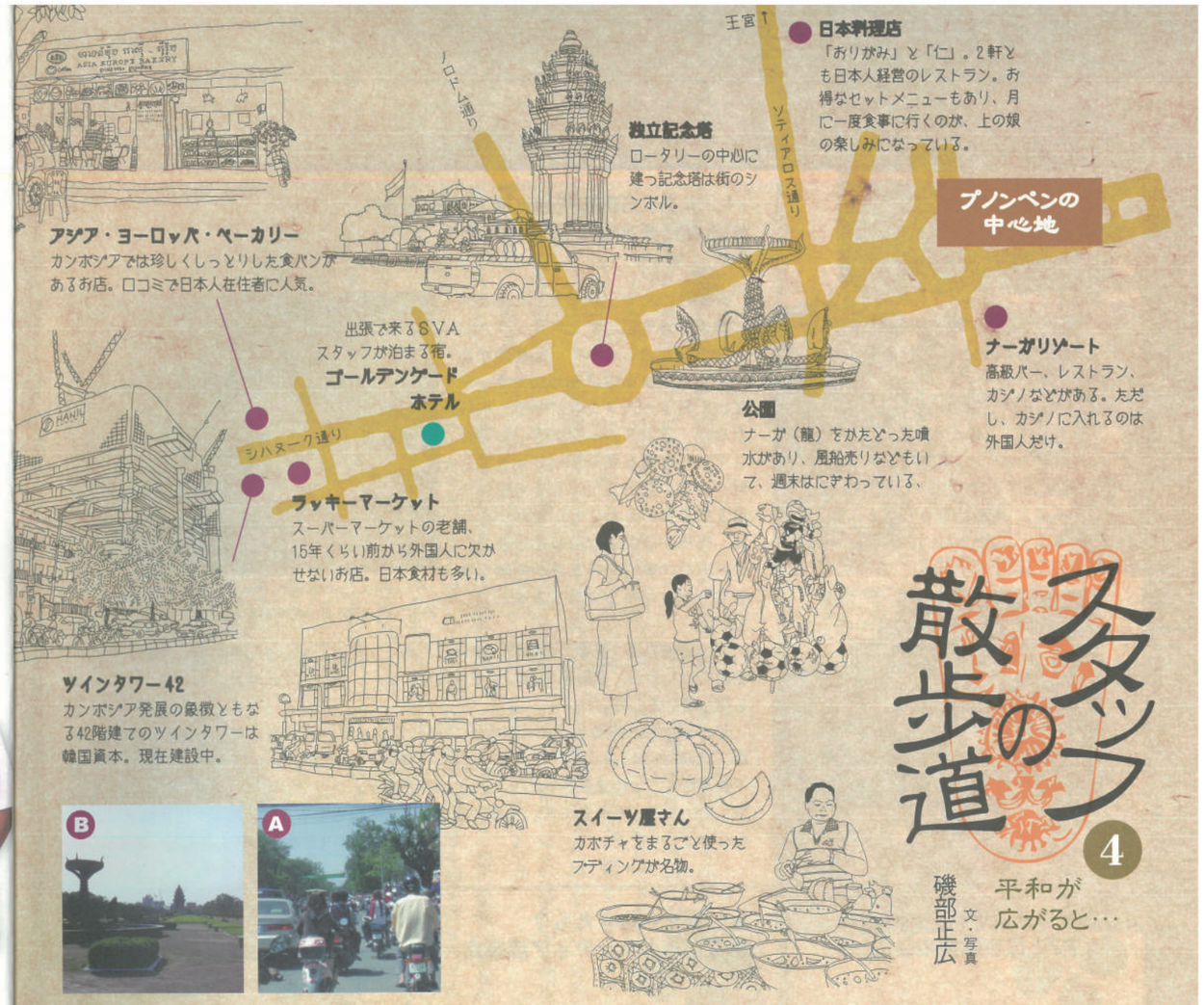
図書館活動は、児童に親しみやすい学習環境づくりや、教員の態度ややる気にも良い影響を与えていることがうかがえます。この事業は今年11月まで続きます。残りの期間は事業終了後も図書活動が持続するよう、州教育局の能力強化に力を入れていきます。

（三宅隆史）

スタッフの散歩道 4

平和が広がると…

文・写真 磯部正広



カンボジアの首都プノンペンはバイク、自動車の数が半端ではない。特にバイクが多く、トゥクトゥクやシクロ（客席が前にある人力自転車）とともに自動車のすきまを埋めている。A

表通りには、歩道にバイクが駐輪されていたり、客待ちのバイクタクシーが停まっていたりして歩道を塞いでいるため、車道を歩かざるを得ない。しかし車道には、自動車が二重駐車されていて、車道の真ん中あたりを歩く羽目になることもある。裏通りでもバイクは途切れることなく走り回っており、歩行者にとっては非常に歩きづらい。

歩くのが危ないので、結局短い距離でもバイクタクシーを使ってしまう。こうして、バイクがさらに普及していくのだろう。子どもたちだけで外を歩かせるのは心配でできない。

そんな中、2人の娘たちを連れても安心して歩けるところがある。それは独立記念塔から王宮にかけての公園だ。B

まっすぐ川に向かって延びる公園は、仏教研究所手前の交差点で終わるが、左を向くと王宮方面へと新しい公園が続いている。家族連れやカップルなどで夕暮れは大賑わい。週末の噴水ショーでは、音楽に合わせてライトの色が七色に変化して水が踊りまわるので、子どもたちに大人気だ。ここで2歳の娘に50円くらいの風船を買ってあげるのが習慣となっている。

B

A

私が初めてカンボジアに来た17年前とは明らかに違って、カンボジアの人たちが安心した顔をしている。当時は、昼間でも撃ち殺されてバイクを奪われるようなことが頻繁に起きていた。その公園で今は家族が団欒している。この国は確かに平和になったのだと感じる。

しかし、交通事故による犠牲者は年々増加しており、今年になってようやくバイクのヘルメット着用、自動車のシートベルト着用が道路交通法で定められ、違反者には罰金が科せられるようになった。しかし、まだまだ交通ルールもマナーも違反が多い。子どもたちが遊びに出かけるのを安心して見送ることができるまでには、まだ時間がかかりそうである。

磯部正広
（いそべ・まさひろ）
1963年愛知県生まれ。2003年SVA入職。カンボジア事務所所長。カンボジア人の妻と娘2人との生活だが、家に帰ると毎日親戚やら知り合いが来ていて、知らないおじさんが寝ていても驚かなくなった。

シャンティな人たち Shanti 48

上杉恭弘
Uesugi Yasuhiro

教育を行きわたらせるため 持続可能なシステムを作りたい

天然記念物マガンや白鳥などの飛来地として知られ、伊豆沼がある登米（とめ）市は宮城県北部の米どころ。豊かな自然のなか、上杉恭弘さんが院長を務める上杉皮膚科医院はある。

東南アジアでの学校建設をしたいと祈念していた上杉さんが、SVAを知ったのは、僧侶である患者さんから聞いたのがきっかけだった。

2004年12月のスマトラ沖地震津波災害のとき、すぐに被災地に駆けつけたが、持参した抗生物質が空港で通関を拒否されてしまう。医師としてはなにも出来ず、忸怩（じくじ）たる思いだったが、その代わりにとSVAへ寄付した浄財がサマキータム寺院図書館（タイ）の開設につながった。それが糸口となり、SVAへの協力が始まる。カンボジア、ラオスの小学校建設の支援へ結びついていった。

地元では、家庭の事情で大学生活を中断せざるを得なかった学生のことを聞き、登米市に働きかけることもしている。2006年、登米市は寄付された奨学金を元に「上杉奨学金貸付基金」を創設。応募資格で成績を問わないのが特徴で、高校・大学生だけでなく、社会人も申請できる。

「日本に生まれた自分は充分に教育を受けられた。しかし生まれた環境のせいで学校に行けない人がいるのは理不尽」。国内・海外を問わず、向学心がある人が経済的な理由で教育を受けられないことがないように、自分の収入を社会に還元している。

関西出身の上杉さんは仙台の大学に進学。工学部を卒業し社会人となったが、医師を志し医学部に再入学する。公立佐沼総合病院に勤務したのち、1998年迫町（当時）で開業した。1日150～300人を診察する日々を送るなか、オーストラリアの大学院で経営学も修めた。社会企業家となり、教育支援を広げたいと考えているからだ。

「学校へ通って教育を受けるのは基本でしょう」と言い切る。途上国の子どもたちの識字率を高めたいが、道のりが遠いこともわかってきた。必要なのは持続可能なシステムを作ることだ。

「寄付頼りだと、景気に左右され財源が増減して、困るのは子どもたち。たとえば、会社を作って電力を売買し、売り上げを学校建設に当てる。基金の運用益で奨学金を出すなど、安定した財源確保を考えたい」。

事業の継続性を現実的に考える上杉さんの姿勢は、支援の一つの方向性を示唆している。

（国内事業課広報担当　清野陽子）

Recommend Book おすすめの一冊

いとしの能登よみがえれ！
ボランティアの能登ノート
文：村井雅清　写真：中山雅照

B5判／54ページ／1500円
震災がつなぐ全国ネットワーク刊

2007年3月、能登半島地震が起きました。「私たちの応援を待っている人がたくさんいるに違いない」と、被災地に駆けつけた村井さんたちボランティアは、そこで暮らす人びとと出会い、「離れがたく能登の地に惹かれていった」と思うようになります。この地域の魅力を伝えることで、能登復興の助けになればと、この写真集は作られました。

古代からの歴史と、地に足のついた人々の生活が美しい写真で紹介されており、「真の復興とは？助け合いとは」を考えさせられます。

この写真集の執筆・プロデュースの村井雅清さんは神戸市在住。「被災地NGO協働センター」代表として、「被災者と痛みを分かち合う」支援活動を続けています。元SVA代議員です。写真は中山雅照さん。

◎売上の一部は能登半島地震復興支援に使われます。
◎この本は、一般の書店では扱っていません。購入の際には（書名、冊数、送り先のご住所、お名前、お電話番号）を明記のうえ、「被災地NGO協働センター」FAX 078・574・0702までお申し込み下さい。